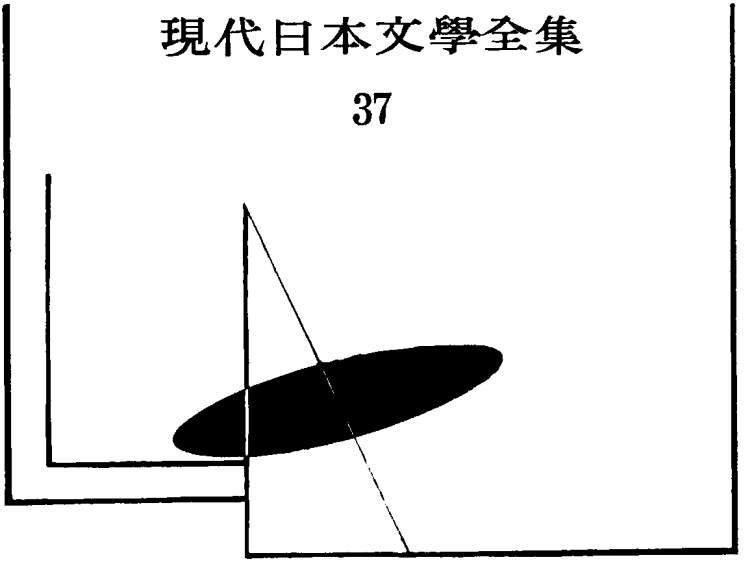
川端康成集

現代日本文學全集

37



筑摩書房版

現代日本文學全集 37

川端康成集

昭和三十年十一月一日 印刷
昭和三十年十一月五日 發行

著者 川端康成

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行者 古田晁

東京都新宿區改代町二三
印刷者 多田基

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行所 筑摩書房
(電話)東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六九七六八

整版 株式會社精興社
印刷 多田印刷株式會社
製本 有限會社矢島製本所

川端康成集　目次

十六歳の日記……五
伊豆の踊子……一五
温泉宿……二六
死體紹介人……四三
抒情歌……六五
禽獣……七六
虹……八六
雪國……一〇六
愛する人達……一五四
再會……二一〇
再婚者……二一九
千羽鶴……二四八
山の音……二九六

末期の眼……三九八
文學的自敍傳……四〇三
純粹の聲……四一〇
川端康成の藝術（伊藤　整）……四一三
解　說……四一九
年　譜……四二四

裝幀　恩地孝四郎

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

川端康成集

生
机
勃
发

十六歳の日記

――作者言ふ。括弧の中は二十七歳の時書き加へた説明です。――

五月四日

中學校から家へ歸つたのは五時半頃。門口の戸は訪問客を避けるためにしまつてゐる。祖父が唯一人寢てるのだから、人が來ては困る。（祖父は盲目でした。）

「唯今。」と言つてみたが、答へる者もなく靜まり返つてゐる。寂しさと悲しさとを感じる。祖父の枕元の一間のところで、

「唯今。」

三尺に近づき、きつい調子で、

「今戻つて來た。」

耳へ五寸で、

「今戻つて來たんや。」

「おお、さうか。朝からしいやつて貰はんので、うんうん言うて待つて、今また西向きに寢返りすんので、うんうん言うてたんや。西向かしてんか。な。おい。」

「ぐつと、からだを提げて――。」

「ああ、そんでええ。蒲團着せといて。」

「まだ具合惡い。もう一ぺん、な。」

「そんな（七字不明）。」

「ああ、まだ具合惡い、やり直して、ええ。」

「ああ、樂んなつた。ようしとくれた。お茶沸いてるか。後でまた、ししさしてんか。」

「まあ、待ちいな。そないに一ぺんに出來るもんか。」

「はあ、分つたはるけど言うとかんとな。」

暫くして、

「ぼんぼん、豐正ぼんぼん、おおい。」死人の口から出さうな勢ひのない聲だ。

「ししやつてんか。ししやつてんか。ええ。」

病床でじつと動きもせずに、かう唸つてゐるのだから、少々まごつく。

「どうするねや。」

「溲瓶持つて來て、ちんちんを入れてくれんのや。」

仕方がない、前を捲り、いやいやながら註文通りにしてやる。

「はいつたか。ええか。するで。大丈夫やな。」自分で自分の體の感じがないのか。

「ああ、ああ、痛た、いたたつたあ、いたたつた、あ、ああ。」おしつこをする時に痛むのである。苦しい息も絶えさうな聲と共に、しびんの底には谷川の清水の音。

「ああ、痛たたつた。」堪へられないやうな聲を聞きながら、私は涙ぐむ。

茶が沸いたので飲ませる。番茶。一々介抱して飲ませる。骨立つた顏、大方禿げた白髪の頭。わなわなと顫ふ骨と皮との手。ごくごくと一飲みごとに動く、鶴首の咽佛。茶三杯。

「ああ、おいし、おいし。」と舌鼓打つてゐられる。

「これで精氣を養ひまする。お前、ええ茶買うて來てくれたけど、あんまり飲んだら毒や言ふんで、番茶を飲んでるね。」

暫くして、

「津の江（祖父の妹の村）へ葉書出してくれたか。」

「はあ、今朝出した。」

「ああ、さうか。」

ああ、祖父は「あるもの」を自覺せられたのではないか。蟲の知らせではないか。（滅多に便りもしない妹に、一度來てくれといふ葉書を私に出させたのは、祖父が自分の死を豫知したのではあるまいかと、私は恐れたのでした。）――私は自分の眼がぼうつとなるまで、祖父の蒼白い顏をみつめてゐた。

――本を讀んでゐると、人の氣配がした。

「おみよか。」

「へえ。」

「どうやつた。」

急に大きい不安が胸に迫つて、私はテエブルから向き直つた。（その頃私は大きいテエブルを座敷に据ゑてゐたのです。またおみよといふのは、五十前後の百姓女です。毎日朝晩自分の家から通つて來て、煮焚きその他の用事をしてゐてくれました。）

「今日行つて、お年は七十五でかういふ理由で寢てられまして、もう三十日も、よく食べ物を上りますのみ、通じがおまへんので、一應伺うて下さいと言ひました。（お年がお年ですから、急なことはありますまいが、年病ですなあ。）と言うてやはりました。」

二人の胸から大きい溜息が出る。おみよは續けて言ふ。

「（食事のよく行けて、通じのないのは腹の中の毛物〔獸〕が食うてますのや。）と言うてやはりました。（今までよりはずつと食が進みませう。これまでよりは咽がよく通りませう。）とは言うたはらしまへんけど、（その毛物は酒が好きです。）て。どうしたらよろしよまつしやろかと言ふと、（妙見様のお卷物を病人にいただかして、部屋中を有難い線香でくすべなはれ。）て。――毛物が憑いてる言うたかて、時間を取り違へなはるくらゐで、別に變つたこともおまへんけどなあ。それでも、もとは鰹節一片でも咽にひつかかりましたのに、近頃は、おすもじ（すし）でもお結びでも一口にいけますし、ああ、あの一々ごくごくと言うて咽佛の動くのが氣に食ひまへん。稲荷さんが巫女に下らはる、あの時も、出やはる時もごくごくと咽佛が下りまつしやろ。それに、この前えらい酒飲みなはつたやろ。今日の占ひ、ほんまでつしやろか。」

「さあ。」

眞向から迷信と言ひ切つてしまふ勇氣もない。私は不思議な不安に襲はれて全く迷つてしまつた。

「それで家へ戻つて、五日市（村の名）へ見て貰ひにい（行）て來ました、と言ひましたら、（もう死ぬて言ははつたか。）と言ひなはるよつて、いいえ、急なことはないが、年病やと言うたはりました、禍ひやと言うたはりました、三十日も通じがないよつてに、一遍見てもろて來ましたと言うときました。」

「それから、戻つて來ておきに（直ぐに）、線香立ててくすべて、（昔から由緒正しいこの家には、そんな方〔毛物のこと〕がゐられない筈です。また、なんでわけもないのに人に害なさる。茶や飯が欲しければ、欲しいと仰しやつたら差し上げます。早速出て行きなさい、出て行きなさい。）と言ひました。道理づくで出して見よとおもて（思つて）な。明日から戌亥のすま（隅）に茶と飯と供へたらよろし。魔除けに、倉の刀を一本出しといとくなはれんか。拔身にして寢間の下へ入れときまよ。それから、明日もう一遍お稲荷さんに伺つてみましよ。」

「どうも不思議やな。ほんまやろか。」

「さあ。ほんまでつしやろか。」

――祖父の枕元で。

「お祖父さん、小野原（村の名）の狩野いふ人から手紙が來てるけど、金いつど借つたんか。」

「ああ、借つた。」

「いつ。」

「七八年前。」

「さうか。」

また飛び出しやがつた。（と言ふのは、あちこちに拵へて置いた、祖父の借金が、その頃一つづつ私に見つかつて來たのです。）

「そんなん、わたえ適ひまへんで。」と、おみよ。（おみよにも金錢上の相談をしてゐたのです。）

――夕飯、祖父は海苔卷のすしを食べてゐられる。ああ、あれ、毛物が食べてるのやろか。それ、咽佛が動いた。現に人間の口へ這入つてるのに、馬鹿馬鹿。しかしもう私の頭には、「毛物が食べてゐるのだ。」といふ言葉が刻みつけられて離れぬ。倉から一劍を取り出し、寢床の上で打ち振り、蒲團の下に入れたのは、自分ながら後で可笑しい。しかし、おみよは大眞面目で、部屋の空氣を切り拂ふ私の恰好を見ながら、

「さう。さう。」と側から勢ひを附けた。若し人が見てゐたら、私は狂人になつたと、どんなに笑つたらう。

やがて暗くなつて、折々、

「おみよ、おみよ。」と呼ぶ細い聲が夜氣を顫はし、その度に祖父の用を足しに行くおみよの足音が、本を讀んでゐる私に聞えてゐた。そのうちに、おみよは歸つたらしい。私が祖父に茶を飲ます。

「うん、さうか、よし、よし、ぐうつと、うん、ぐうつと。」で、咽佛がごくごく動く。これ、毛物が飲んでゐるのか。馬鹿、馬鹿。そんな妙なことがあるものか。中學の三年生にもなつて

ゐて――。

「ああ、おいし。茶はよい。淡泊でよい。餘りおいし過ぎるものはいかん。ああ、おいし。――煙草は？」

ランプを顏すれすれに近寄せると、眼を少し開いて、

「なんや。」と言はれた。おお、もう再び開かれないのかしらんと思つてゐた眼が、この眼が開いた。一道の光明が暗黑の世界に射したやうに嬉しかつた。（祖父の盲目が治るだらうと思つたのではありません。その時祖父は瞼を閉ぢてゐたのでせう。そのまま死ぬのではないかと、私は不安だつたのでせう。）

――これまで書き續ける間には、いろんなことを考へた。さつき劍を振り廻したことなんどは可笑しくなつた。阿呆らしくなつた。しかし、「腹の中の毛物が飲食してゐるのだ。」といふ、この言葉は私の體ぢゆうにくつついてゐた。――今はかれこれ九時。「毛物が憑いてゐる。」そんなことはないといふ意識がいよいよはつきりし、腦は洗はれたやうだ。

――十時頃、おみよ祖父のおしつこをさせるために來る。

「寢返りしたいなあ。――今どつち向いてるのや。うん、さうか、東か。」

「よつこらしよ。」と、おみよ。

「ううん。」

「もう一つ。」と、おみよ。

「ううん。」苦しい聲だ。

「こんで西向いたんか。」

「もうあんたもお休みやす。わてえも歸りまつさ。もう用事しまひでつしやろ。」

間もなく、おみよは歸つて行つた。

五月五日

朝。雀が鳴き始めると、おみよが來る。

「さうでつか。二度？　十二時と三時とに起きて、しいやつてあげなはつたんか。若いのに氣の毒でんな。お祖父さんに恩返しすると思うてな。――子が生れなんだら泊りまんねやけど、お菊は子を產むことを知つてても、子を育てることは知りまへん。」（お菊といふのはお美代の息子の嫁です。その頃初產をしたのでした。）

お祖父さんに恩返しすると思うて――私はこの言葉ですつかり滿足した。

學校へ出た。學校は私の樂園である。學校は私の樂園――この言葉はこの頃の私の家庭の狀態を最も適切に現はしてゐはしまいか。

――夕方六時頃、おみよ來る。

「へえ、詣つて來ました。同じこつてした。不思議です。毛物やとは言うてやはらしまへんけど、禍ひ（憑きもの）です、て。道理の分からん者やないよつてに、（そない騷がいでも出ますやろ。）て。――それに、やつぱり年病です、て。（急なことはないけど、追々體が弱つて行きますやろ。）て。」

追々弱つて行きますやろ。――胸の中で幾度も繰り返しながら、

「さうか。」と溜息する。

「まだそれから、稻荷さんの言ははること、よう當りましたで。（この頃はちよつとましやろ、無茶飲み無茶食ひは止んだやろ。）て。――ぼんぼんにもさう見えまつか、今日は大人しいと。」

稻荷さんが病人の狀態を言ひ當てたのを不思議に思ひ、禍ひ（憑きもの）とは本當であらうかと、また迷ひ始めた。

家にある僅かの金で買つた線香の煙枕頭に渦卷き、秋水煌々と床上に橫たはつてゐる。

「夏になつたら難儀でんな。」と、おみよ。

「なんでや。」

「百姓は田が忙がしくなつて、わたえも來てゐられまへんよつてにな。この有樣では、もう一遍火鉢の傍へ出るやうに、ようなりなはらひんかいな。」

ああこの百枚の原稿を書き終る時、書き終るまでに、祖父の身は、不幸な祖父の身はどうなつてゐるだらうか。（私は原稿紙を百枚用意して、こんな風な日記を百枚になるまで書き續けたいと思つてゐたのでした。日記が百枚になる前に祖父が死にはしないだらうかと不安でした。日記が百枚になれば祖父は助かる。――なんだかそんな氣持もするのでした。そしてまた、祖父が死にさうに思へるからこそ、せめてその面影をこんな風な日記にでも寫して置きたいと思つてゐたのでした。）

――病人の言葉は一時程矛盾撞着しなくなつ

た。しかし「憑き物が禍ひをしてゐる。」とは、迷信か、迷信でなくて本當か。

五月六日

「ぼん、もう學校へいきましたか。」と祖父がおみよに言ふ。

「いんえ、今は夕方の六時でつせ。」

「おお、さうかいな。ははははは——。」寂しい笑ひ聲だ。

夕飯は細い海苔卷二本、口に入れて貰つて丸呑みである。

「食べ過ぎんか。」と、今日は訊ねてゐられる。常にないことと、私は風呂で聞いてゐる。すると間もなく、

「まだ早いやろけど、えらう腹空いた。ぼんより先きに晩飯食べさしてんか。」

「今お上りやしたところやおまへんかいな。」

「さうかいな。」

後は聞えずに、またあの笑ひ聲が聞える。私は湯の中で寂しい。

——夜、家の中は柱時計の音と空氣ランプの灯の音とだけだ。眞暗な奥の部屋から、

「しんど。しんど。ああ、しんど（苦しい）。」と、千切れ千切れに、天に訴へるやうな聲が吐き出される。やがて、その聲が止んでまた靜か。

——また、

「ううん。ああ、しんど。」

短い苦しさうな聲は、私が寢るまで、絶えては續き、續いては絶えてゐた。それを聞きながら私は、

「急なことはないけど、追々體が弱つて行きますやろ。」と心の中で幾度も繰り返してゐた。祖父の頭は少ししつかりして來た。常識を取り戻して來た。無茶食ひなぞも慎むやうになつた。

しかし、身體は日々に——。

五月七日

「よんべ（昨夜）は、しし一ぺんと、ほかに二度程寢返りとか茶とかで起された。（もつと早く起きてくれてやないと、呼び疲れて息が切れます。）て叱られたけど、寢入つたんが十二時頃やさかい、なかなか目が覺めん。」

朝、おみよが來るのを待つて、私は訴へる。

「氣の毒でんな。わたえも頭痛が治つたら十二時頃までお内にゐたげまつさ。晝でも二時間來んと、（泣いて暮してました。）て仰しやるよつてに、一時間毎に來たげてるんでつせ。」

昨夜は眠い私を起しては、病人がわけの分らない無理ばかり言ふので、憤り罵つたり、靜かに考へ直して不幸な人と悲しみ泣いてみたりしたのだつた。

——中學校に行かうとしてゐると、祖父は、

「いつ良うなりまつしやろ。」と、九まで絶望し一の希望に縋つた聲で問はれた。

「順氣（氣候）が定まつたら、良うなんなはるやろ。」

「えらい世話かけまんな。すみまへん。」憐れみを乞ふ細い聲だ。

「大神宮樣達がこの家の上へ集まらはつた夢見ました。」

「大神宮樣を信心したらよろし。」

「そのお聲が聞えました。有難いことやおまへんか、神や佛が捨てやはらひん。勿體ないことやおまへんか。」滿足した聲だ。

——學校から歸ると、門口が開いてゐた。しかし家の中は靜かであつた。

「今戻つて來た。」と三度言ふ。

「おお、ぼんか。後でししさしてんか。」

「はあ。」

これくらゐ私に嫌な仕事はない。私は食事をすませて、病人の蒲團を捲り、溲瓶で受ける。十分經つても出ぬ。どんなに腹の力がなくなつてゐるかが知れる。この待つ間に、私は不平を言ふ。厭味を言ふ。自然に出るのだ。すると祖父は平あやまりに詫びられる。そして日々にやつれて行く、蒼白い死の影が宿る顏を見ると、私は自分が恥しくなる。やがて、

「あ、痛たつた、いたたつた、ううん。」細く鋭い聲なので、聞いてゐる方でも肩が凝る。そのうちに、チンチンと清らかな音がする。

——夜。テエブルの抽出しを掻き廻してゐると、「構宅安危論」が出て來た。これは祖父が口述し自樂（隣村の男。祖父の易學や家相學の弟子。これは家相の本。）に筆記させたものである。出版しようと努力し、豐川（大阪の大金持）にも相談されたが、駄目だつたこの草稿、今は全く忘れられて私の机の奥に引つ籠つてゐ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

る。ああ、祖父は一生の間何一つ志を遂げず、手を下したことは何もかも失敗ばかり、その心中はどうだらう。ああ、ようこそこの逆境で七十五まで生きてゐて下さつた。心臓の丈夫さ。（祖父が悲しみに堪へて長生きすることが出來たのは、心臓が丈夫だからだと、私は思つてゐたのです。）何人もの子や孫に先立たれ、話相手もなし、見ることも聞くこともない、（盲目で耳が遠いのです。）全くの孤獨だ。孤獨の悲哀――とは祖父のことだ。「泣いて暮してました。」と言はれる口癖も、祖父にあつては眞情なんだ。

（祖父の八卦や家相はよく當りましたので、ちよつと有名でした。遠くの國から見て貰ひに來る人もありました。ですから祖父は、「構宅安危論」を出版すれば、世の不幸な災禍が救はれるものと考へてゐた事でせう。その頃私は祖父の易や家相を信じるでもなく信じないでもなく、あやふやな氣持だつたと記憶してゐます。それにしても、いかに田舎とは言へ、十六歳で中學の三年生にもなりながら、三十日も便祕してゐた祖父を醫者に見せようともせず、稲荷さんに占つて貰つたりして、「憑き物」ではあるまいかなぞと思つてゐたことを、今から考へると、笑ふにも笑へない氣持です。

また、祖父が豐川といふ金持と知り合ひになつたのは、お寺のことからでした。私の村に尼寺がありました。昔多分私の祖先が建立したものらしく、寺の建物や山林田畑は私の家の名義になり、尼さんは私の家に籍が入つてゐました。黄檗宗で虚空藏菩薩を本尊としてゐました。毎年十三詣りの日には、近郷近在から十三になつた子供が集まつて賑はひました。ところが私の村から一里ばかり北の名高い山寺に籠つてゐた聖僧が、この寺へ移つて來ることになりました。祖父は非常にありがたがつて、尼さんを追ひ出し、その寺に附いた財産の名義を手離しました。寺は立派に改築されて、名も變りました。その普請中、虚空藏その他の佛像を五六體、私の家の座敷に預つてゐました。そのお蔭で、疊を入れる金がなくて間に合せの簾筵を敷いてあつた座敷に青い疊が匂ひました。――この新しく來る聖僧を信心し、寺を改築し、また私の家の座敷に疊を入れてくれたのが、豐川といふ大金持だつたのです。）

――祖父のやさしい心は時々現はれる。今朝も、おみよが、

「子產れ餅を三十軒拵へときましたが、思はん所からお祝ひをくれやはるので、足らんやうになりました。また拵へんなりまへん。」と言ふと、

「さうか、三十軒か。まだその上にか。この五十軒足らずの村で、お前とこみたいな家やのに、そない方々からお祝ひが來るか。」

後は何やら、涙聲に涙が交つて嬉し泣きしてゐられる。（おみよのやうな貧乏な家でありながら、多くの家から祝ひが貰へたことを、祖父は喜んでやつたのです。）

――おみよは、祖父の世話をする私を氣の毒に思つてゐる。夜の八時頃、おみよが自分の家へ歸りがけに祖父に言ふ。

「しし出やいたしやへんか。」

「はあ。」

「そんなら後でもう一ぺん來まつさ。」

「わしがゐるから來いでもええ。」と、私は口から半分出したが出さずにしまつた。

五月八日

朝、おみよが來るのを待ちかまへて、祖父は昨夜の私の不親切をくどくどと告げて不足を言つてゐられた。私も少しは惡かつたかもしれない。しかし、夜中に何度も起されると腹が立つのだ。それに、おしつこをさせるのが嫌なのだ。おみよは私に言つた。

「不足ばかり言うて、自分のことばかり考へて、世話する人の身をお考へやすことはちつともないよつてに、かなはん。お互ひに因果とおもて（思つて）世話してますのやのにな。」

今朝はもう一切ほつて置いてやらうとまで思つた。毎日學校へ行く前に、用事はないか、と聞くのだが、今日は默つて家を出てしまつた。けれども學校から歸ると矢張り氣の毒であるといふ心が起る。

――おみよが言ふ。

「今日、この間見て（占つて）もらひにいた（行つた）ことを話しました。そしたら（よういて來とくれた。その時分には、何でも二口に

食べなんだのをぼんやり覺えてる。なんぼでも飲めたのを覺えてるやうや。）て。」

これを聞くとまた、腹の中の毛物が飲食してゐる、といふ言葉を思ひ出す。

――夕食の後、

「ほんまに親密な話をする。安心し。」

安心し、が可笑しい。

「こない困つてるのに、何を安心しますのやろ。」と、おみよは笑つた。

かと思ふと、

「もういい加減で御飯食べさしてんか。」

「今しがた食べたところやないかいな。」

「さうか。知らん。忘れた。」

私は悲しく呆れた。言葉は日々に低く、元氣なく、聞き取りにくくなる。同じことを十數度繰り返して言つてゐられる。

さて、私は机に向つて原稿用紙を擴げ、おみよは坐つて、所謂親密な話を聞かうと用意する。（私は祖父の言葉をそのまま筆記しようと思つたのです。）

「あの、ぼんの銀行の印形知つてて か。さうか。わしの生きてるあひだはあの印形せんならん。（なんのことだか分りません。）――ああ、やり損ひばかりで、先祖代々の財產をつぶしたけど、これでも一生氣張つて來ましたんやで。東京へいて（行つて）大隈さん（大隈重信侯）に會ふのやつたのに。家に坐つてるうちに、こない弱つてしもて。――ああ、松尾の田地十七町あるのん、わしの生きてる間にすつかりぼんのものにしてやりたい心で一ぱいやつて來たのに、仕方がない。（祖父は若い時から例へば茶の栽培とか寒天の製造とか言つた風のことをいろいろやつてみては悉く失敗し、また家相を氣にして建てたり壞したり造り直したりしてゐるうちに、次々と田や山を二束三文で賣つてしまつたのでした。そのなくした財產の一部が松尾といふ灘の造り酒屋の手に纏まつてゐたのです。せめてこれだけを取り戻したいと、祖父は常々考へてゐたのでした。）もう十二三町もぼんの田地を持たしたら、しつかりしたもんや。大學卒業したら、ばたばたせんでもええのに。島木（叔父の家）や池田（伯母の家）の世話になるのは、ぼんが氣の毒や、あの田地がぼんのものになつたら、わしが死んでも御前さん（前に書いた新しい寺へ來た聖僧）に相談してこの家をぼん一人で守つていけるのに。鴻池（金持といふ言葉の代用語）のやうに錢さへあつたら、腰辨當がいりまへん。わしのこの思ひを通しにな、東京へいくつもりやつたのに殘念なことにはいけまへん。いけんと言うて、このままには、すましてゐられまへん。早うぼんをしつかりした一家の主人にしてやつたら、一生涯人の世話にならんのに。目が見えたらな、大隈へいつたら、何でもないのに。ああ、わしはどうしても、東京へいくよつてに、慈光さんと瑞圓さんと（新しい寺の聖僧とその弟子）西方寺（村の檀家寺）とに相談して來てんか、な。」

「そんなことしたら、東村氣違ひやと言はれる。」

（祖父が東京へ行つて大隈重信に會ひたがつてゐるのは、祖父自身としては目的があつたのです。祖父には漢方醫の藥術の心得が多少ありました。また私の父は東京の醫學校を出た醫者でした。そこで祖父は父の西洋醫術を幾分見覺えて、それを自分の漢方の藥術に加味し、久しい間田舍の人々に施藥をしてゐました。そして祖父はこの我流の藥術に强情な自信を持つてゐました。祖父がこの自信を一層强めたのは村に赤痢が流行した時でした。前に書いた尼寺が改築されるので、その佛像を私の家の座敷に預つてゐた年の夏でした。五十軒ばかりの村で、一軒に一人平均と言つてもいい程の多くの赤痢患者が出て、臨時の避病院を二個所に新築した程の騷ぎでした。野までが消毒劑の臭ひでした。村の人達は尼寺の古い佛を動かした祟りだとも言ひました。ところが、私の祖父の藥で赤痢が割合手輕に治ることがありました。患者を隱蔽して置いて、こつそり祖父の藥を飲ませ、それで助かることがありました。避病院にゐる患者のうちにも、病院の藥を捨てて祖父の藥を飲む者もありました。病院から見放された病人が祖父の藥で助かつたりしました。それが果して醫學的にどれだけの價値のあるものかは分りませんが、とにかく祖父の藥が不思議な利目を現はしたことは事實でした。ですから、祖父はこの藥を世に廣めたいと考へるやうになりました。そしてその後自樂〔前出の人物〕に願書を書かせ

て、三四種の藥を賣り出す許可を内務省から得ました。しかし、〔東村山龍堂〕といふ屋號のやうなものを印刷した包紙を五六千枚印刷したぐらゐのことで、その製藥の仕事は立ち消えになつてしまひました。これらの藥が死ぬまで祖父の頭にあつたのです。そして東京へ行つて、尊敬する人物大隈重信に會へば助力を受けることが出來ると、子供のやうな確信を持つてゐたらしいのです。藥の外にも、「構宅安危論」の出版のことなぞを考へてゐたのでせう。)

「この家は北條泰時から出て七百年も續いたんやさかい、相變らず續きます。ばたばたばたつと昔の盛大に戻る。」

「大きな話しなはるなあ。今にも出來さうな口振りや。」と、おみよは笑ふ。

「わしの生きてゐる間は島木や池田の世話にならんのに。ああ、家がこないならうとは思はなんだのに。——思ふと、おみよ悲しい。聞いとくれや。わしがこんなに思ふ心根を考へてや。」

おみよは可笑しがつてさつきからしきりと笑ひころぶ。私は相變らず祖父の言葉を寫し續ける。

「もう一息といふところやのに、わしのからだが弱つてしもた。金の二千や三千ならどうかしらんけど、十二三萬圓やなんてな。ああ、ならんことを頼むのや。わしがいかんでも、大隈さんがここへ來てくりやはつたら。可笑しいか。さう笑うとくれな。人を馬鹿にしとくれな。かなはんことをかなはすのや。な、おみよ、かなはんなら、七百年の家も駄目。」

「そやかて、ぼんがおゐやすがな。そんな天の星を引つぱるやうなこと言うて氣をもむのは、病ひの毒でつせ。」

「わしが馬鹿か。」聲は鋭かつた。「命さへあつたら、ああ一生に一ぺんでもあの老人(大隈)に會ひたい。あとより(後へさがること)ばかりしてたら、あかひん。ああ、たとへ佛になつても小さい胸の一心を保ちたい。お前から見たら、わしや馬鹿や。一ぺんししさしてんか。これがかなはなんだら、いつ池へはまつて死んでも惜しいことない。ああ。」

私は心中靜かに悲しくなり、笑ひもせず、むつかしい顏をして一語一語寫してゐた。おみよの笑ひも止まつて、頰杖突いて聞いてゐる。

「東京へいかうと思ふと、こんなからだになり、邪魔ばかりはいつて、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。これがかなはなんだら、池へはまつて死んだ方がましや。甲斐性なしやよつてにな。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。ああ、奮ひ立つ心を話しや笑はれるし、ああ、こんな社會にゐたくない。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。」

私にはランプの光が暗くなる。

「ううん、ううん。」苦しい聲が次第に高くなる。

「世の中で引込思案ばかりしてて長生きしてもええと言ふのやない。ああ、五十年同じ心で暮して來た人が總理大臣や。(當時大隈侯が總理大臣でした。)ああ、いごけん(動けない)のが殘念や、殘念や。」

おみよが祖父を慰めて言ふ。

「皆の不運です。けど、ぼんが出世しなはつたらよろしよまつしやないか。」

「出世言うたかて、高が知れてるが。」と、高い聲を出してぐつと私を睨む。——なんだ老耄。

「さう言うたらさうでつけど、お金のたんとある人が羨しいとも言へまへん。松尾を見なはれ。片山を見なはれ。本尊さんの性根一つでつせ。」(松尾といふ造り酒屋も片山といふ私の親戚も、その頃家產が傾いてゐたのです。)

「南無阿彌陀佛。」

ランプの火で、祖父の長いひげが銀色に光つて寂しい。

「この世にはいささかも執心してゐるのではごわへん。この世よりあの世が肝心です。けど、引込思案ばかりして極樂へ參りたうもおまへん。」

「この間から、西方寺のおつさん(和尚さん)に相談があるさかい呼んで來て言ははりまんね。そやけど、いつも留守や留守やと言ふときまんので、腹が立つてまんね。」と、おみよが祖父の言葉の切目を待つて、祖父の不機嫌を說明するつもりで、私に言つた。私こそ腹が立つた。祖父に同情した。何も騙さなくともいいではないか。

「この人間界で、僅か中學をまだ卒業せんくらゐではな。ああ。」

祖父は今日は馬鹿に私を見下げる。

やがて寢返りして、あちらを向かれた。私は明日試驗の英語の教科書を開いた。私の世界は一寸四方の中に押し込められたやうに、きりきりしまつて固くなつてゐた。今晩の祖父の聲は、もうこの世の聲でなかつた。おみよが歸つて行つた後で、私は祖父に自分の將來の希望を告げて慰めてやらうかと屢々思つた。夜が更けて、「人間の一生の方針ちふもんはむつかしいもんやな。」と深い底からのやうに、突然祖父。

「はあ。むつかしいな。」と、私。

五月十日

朝のこと、

「おつさん（和尚）まだ來てくりやはらひんか。」

「へえ。」

「この頃、自樂さん一ぺんも來てくりやはらんな。元は毎日來てたやないか。自樂さんに一ぺん人相を見て貰ひたいね。」

「人相はこの前と變つたところはおまへん。そない急に變るもんやない。」

「一ぺん人相見てもろた上でおつさんに會うて相談して、志望を貫かなおきまへん。」

決心が強い語調に現はれてゐる。

「自樂さんに一ぺん會ひたい。」

「自樂さんみたいな者、何になるもんか。」

私はひとりごとのやうに小聲で呟いた。

五月十四日

「おみよ。おみよ。おみよ。」と、祖父が呼ぶ聲で眼を覺まして、

「なんや。」と起き上つてみると、

「おみよ來たか。」

「まだや。今まだ夜の二時頃やで。」

「さうか。」

それから朝まで、祖父は五分あけずにおみよの名を呼び續けてゐられた。私は夢現に聞いてゐた。おみよの來たのは五時頃。

——學校から歸ると、おみよは言ふ。

「今日は無理ばかり言ひなはつて、傍からちつとも離さずに、やれしし、やれ寢返り、やれ茶や煙草やで、まだ朝から一ぺんもうちへいんでしまへん（歸つてゐない）。」

「醫者を呼んで見せたらええのやけどな。」

前から思つてゐたのだが、立派な醫者を呼ぶには金が入る。また、祖父の眼中に醫者なぞないから、醫者に診察されることに腹を立て、面前で醫者を罵られては困るといふ心配もある。今朝も、

「醫者なんて爪切鋏にもなるもんか。」

——夜。

「おみよ、おみよ、おみよ。」

私はその聲をわざと聞き流しながら、耳まで靜かに行く。

「なんや。」

「おみよもういんだか。朝飯も食はさんと。」

「今、晩飯食べたやないか。まだ一時間もたたひんで。」

分つたのか分からないのか、大變表情が鈍くなつた。

「寢返りさしてんか。」

なんだかぼじやぼじや言はれたが、一向分らぬ。聞き返しても答へようともせず、甚だ賴りない。

「茶飲ましてんか。」

「ああ、こんな茶、なまぬるい。こんな茶、ああちめた（冷たい）。こんな茶、どんならん。」

憎々しい聲だ。

「勝手にしろ。」と、默つたまま枕邊を去る。

暫くするとまた、

「おみよ。おみよ。」

私の名は決して呼ばれなくなつた。

「なんや。」

「今日池田（伯母の家。私の家から五六里離れた町）へいて榮吉つつあんに會うたか。」

「池田へなんていかひんで。」

「さうか。そんならどこへいつたんや。」

「どこへもいかへん。」

「不思議やな。」

何からこんなことを言ひ出したか、私の方こそよつぽど不思議だ。宿題の作文を書いてゐると、またまた、

「おみよ、おみよ、おみよ。」と呼ぶ聲が、息苦しく、高くなる。

「なんや。」

「ししさしてんか。」

「はあ、おみよはもういんだで。夜の十時過ぎ

や。」
「御膳食べさしてんか。」
　私は呆れてしまつた。
　祖父は脚も頭も、くしやくしやに着古した絹の單衣物のやうに、大きな皺が一杯で、皮をつまみ上げると、そのままで元へ戻らない。私は大變心細くなつた。今日は何かにつけて私の氣にさはることばかり言はれる。その度に祖父の顏がだんだん險相になつて行くやうに思ふ。私が眠るまで絶えたり續いたりする祖父のうめき聲のために、私の頭は不快に滿ち滿ちて。

五月十五日
　今日から四五日おみよは差支へあつて、代りにお常婆さん（出入りの家の老婆）が來てくれる。學校から歸つてお常に言ふ。
「お常さん、無理言うてでしたやろな。」
「いいえ、ちつとも。用事がおまへんかてたづねにい（行）きますと、ししがしたいとか言ひなはりまつけど、えらいおとなしでした。」
　私はこの遠慮を限りなくいぢらしいと思つた。
　今日は大變苦しさうだ。いろいろに慰めて見ても、
「ううん、ううん。」と、返辭か喘ぎか分からないものを繰り返してゐられるばかりだ。せつなさうなうめき聲の斷續は私の頭の底まで響いて、私の命を一寸刻みに捨てて行くやうにつらい。
「おうい、おうい。おみよ、おみよ、おみよ、おみよ、おうい。ああん、ああん。」
「なんや。」
「しし出ます。はよはよ（早く早く）やつて。」
「よろしい受けたで。」
　五分間ほど溲瓶をあてがつたままでゐると、また、
「ししはよやつて。」
　感覺が麻痺してゐる。私はふびんに思ひ悲しかつた。
　今日は熱がある。一種嫌な臭ひが漂つてゐた。
――私は机に向つて本を讀んでゐる。長く高い呻き聲。五月雨の降る夜。

五月十六日
　夕方の五時頃、四郎兵衞さん（分家の老人。分家と言つても名義上のことだけで、血のつながりは少しもないものですから、祖父は餘り親しく交はつてはゐませんでした。）が見舞ひに來られた。いろいろ慰めてゐられたが、
「ううん、ううん。」の呻き聲が祖父の返辭だ。四郎兵衞さんはいろいろの注意をしてくれて、
「若いのに大ていやおまへんやろけど、どうぞ一つ賴んまつせ。」と私に言つて歸られた。
　七時過ぎに、
「遊びに行つて來るで。」と、私は家を飛び出してしまつた。十時頃、門口まで歸ると、
「お常さん、お常さん。」と呼ぶ祖父のたまらなさうな聲が聞えるので、急いで、
「なんや。」
「お常さんは？」
「もういなはつた（歸つた）。十時やもの。」
「お常さん御膳食べさしてくりやはつたかいな。」
「食べたくらゐな。」
「おなか空いた。食べさしてんか。」
「もう飯はなし。」
「さうか。困つたなあ。」
　こんな整頓した會話ではなかつた。いつもおきまりの下らないことを、何度も何度も繰り返してゐられる。こちらの言ふことは耳に入つたといふだけで、直ぐに拔けて、また同じことを問ひ返される。頭がどうかなつてゐるのか。

　日記はこれでおしまひだ。この日記を書いてから十年後、島木の叔父の倉で私が見つけた日記はこれだけだ。中學校の作文用紙に三十枚ほど書いてある。多分これだけしか書かなかつたのだらう。この後は書いてゐられなかつたのだらう。なぜなら、祖父は五月二十四日の夜死んだのだから。そして、この日記の最後の日は五月十六日だ。祖父の死の八日前だ。十六日以後は祖父の病氣が一層惡くなつたり、家の中が混雜したりしたので、日記どころではなかつたのだらう。
　ところが私がこの日記を發見した時に、最も不思議に感じたのは、ここに書かれた日々のやうな生活を、私が微塵も記憶してゐないといふ

ことだつた。私が記憶してゐないとすると、これらの日々は何處へ行つたのだ。どこへ消えたのだ。私は遠くを見送つて悵然とした。人間が過去の中へ失つて行くものに就いて考へた。

しかしとにかく、これらの日々は伯父の倉の一隅の革のカバンの中に生きてゐて、今私の記憶に蘇つた。このカバンは醫者の父が往診の時持つて歩いたものだ。私の叔父は最近相場の失敗から破産して、家屋敷まで失つた。倉が人手に渡る前に、私は何か自分の物が入れてないかと搜してみた。そして、鍵のかかつた、このカバンを見つけた。傍にあつた古刀で革を破ると、中は私の少年時代の日記で一ぱいだつた。そのほかに、この日記が混つてゐた。私は忘れられた過去の誠實な氣持に對面した。しかし、この祖父の姿は私の記憶の中の祖父の姿より醜くかつた。私の記憶は十年間祖父の姿を淸らかに洗ひ續けてゐたのだつた。

この日記の日々は少しも記憶してゐないけれども、初めて醫者が來た時と祖父の臨終の日とのことは、流石にはつきり記憶してゐる。常々から醫者に對して甚だしい輕蔑と不信の念を抱いてゐる祖父だつたのに、さて醫者を迎へてみると、掌を返すやうに醫者を信賴し、涙を流して感謝した。寧ろ私が祖父にひどく裏切られた氣持を感じた。その祖父が哀れに思はれ、痛々しかつた。祖父が死んだのは昭憲皇太后の御大葬の夜だつた。私は中學校の遙拜式に出席しようかしまいかと迷つてゐた。中學は私の村から二里ばかりの南の町にある。なぜだか分らないが、私は神經的に遙拜式に參列したくてならなかつた。しかし、その留守に祖父が死にはしまいか。おみよが祖父に聞いてくれた。

「日本國民の務めやさかい行つといで。」

「わしが歸るまで生きてるか。」

「生きてる。行つといで。」

私はもう八時の遙拜式に遲れさうなので路を急いだ。下駄の鼻緒が切れた。(私の中學はその頃和服だつた。)私はしよんぼり家へ歸つた。意外にもおみよが、迷信だと言つて、私を勵ました。私は下駄を替へて學校へ急いだ。

遙拜式がすむと、急に不安が强くなつた。町の家々の御追悼の提燈が明るかつたのを覺えてゐるから闇夜だつたにちがひない。私は下駄をぬいで跣になり、二里の路を走り續けて歸つた。祖父はその夜の十二時過ぎまで生きてゐた。

私は祖父が死んだ年の八月家を捨てて、叔父の家に引き取られた。家に對する祖父の愛着を思ふと、その時もその後家屋敷を賣る時も少しはつらかつた。しかしその後、親戚や學寮や下宿を轉々してゐるうちに、家とか家庭とかの觀念はだんだん私の頭から追ひ拂はれ、放浪の夢ばかり見る。祖父が親戚に見せるのも不安に思つて、最も信賴してゐたおみよの家に預けた、私の家の系圖も、今日までおみよの家の佛壇の抽出しの中に鍵をかけたままで、見たいと思つたこともない。しかし私は祖父に對して別段やましいとは思はない。何故なら私はおぼろげながら死者の叡智と慈愛とを信じてゐたから。

(大正三年五月)

(大正十四年八月—九月)

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com